

## 生ける神に仕えよう

2010.2.16(火)  
ベック兄メッセージ(メモ)

### 引用聖句

ダニエル書 6章20節

その穴に近づくと、王は悲痛な声でダニエルに呼びかけ、ダニエルに言った。「生ける神のしもべダニエル。あなたがいつも仕えている神は、あなたを獅子から救うことができたか。」

テサロニケ人への手紙・第一 1章9節、10節

私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、また、神が死者の中からよみがえらせなされた御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。

パウロはテサロニケにいる兄弟姉妹に、ただ今読んでいただきましたように書いたのです。彼の書いた文章を読むと分かります。彼は本当に感謝でいっぱいでした。結局彼らはあの地方で「光」になったのです。彼らを通して、いろいろな人々が福音を聞いただけではなく、導かれるようになりました。『私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、またあなたがたがどのように偶像から神に立ち返って生けるまことの神に仕えるようになったか。』彼らは主を信じただけではなく、主に仕える者、即ち「生けるまことの神に仕える者」となりました。このように彼らはパウロの同労者となり、主の同労者となりました。パウロと一緒に働く者となっただけではなく、「主と共に働く者」となりました。

そしてダニエル書の中で、既に同じ気持ちで主に仕えた人々がいたことが分かります。6章20節は良いことばでしょう。『生ける神のしもべダニエル。あなたがいつも仕えている神はあなたを獅子から救うことができたか。』

私たちがどのような状態にあるとき、最も素晴らしく主のご栄光を拝することができるのでしょうか。ダニエルのように、獅子の穴にいる真っ暗なとき、悪魔が勝利を握っているかのように思われるどん底に落ちたときに、一番素晴らしく主のご栄光を拝することができるのです。主は私たちを、少しも妥協するところなくひたすら主に仕え、ダニエルのように奇跡を経験する人になさりたいのではないのでしょうか。ダニエルは、一つの約束を

信じたのです。「確信」したのです。即ち、エレミヤ書 33 章の主の約束です。

エレミヤ書 33 章 3 節

**「わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。」**

これこそ、主のみこころ、主の願いそのものです。「わたしを呼べ」、主はお答えになりたいのです。「あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう」、このことこそダニエルの経験でした。主に仕えようと、主は働いてくださり、奇跡をなして下さることを、彼は何度も何度も経験しました。

ダニエルが生きていた頃の歴史的な背景を見てみたいと思います。その頃は、それまで世界歴史の中心に位していたユダヤ人たち、即ちイスラエルの民が主から離れ、みことばを大切にせず、主に対して不従順であったため、主の御目から離され、結果として歴史の中心はユダヤ人ではなく、異邦人の時代へと移っていくという大切なときでした。

「異邦人のとき」は、紀元前 606 年バビロンの世界制覇によって始められました。バビロンの王であるネブカデネザルは、イスラエルを占領し、(もちろん、主が許されたからです。)イスラエルの多くの人々を虜にして、バビロン即ち自分の国へ連れ帰りました。その中にダニエルという青年もいたのです。何才であったか分かりませんが、おそらく二十才に未だなっていなかったでしょう。彼はバビロンの王宮に召し上げられ、そこで教育を受けました。どうしてか、なぜか分かりませんが、王に大切にされたのです。

王は彼を大切にし、彼は王に愛されました。後に、王が見た二つの夢を解き明かしたので、ダニエルは非常に高い政治的地位を与えられました。やがて彼は壁に書かれた文字を解くことによって、ネブカデネザルの甥であるベルシャツアルにも召し上げられ、国の第三の権力者に命じられました。しかし、ベルシャツアルによってダニエルが国の第三の司に任命された夜、即ち何時間か後に、このベルシャツアル王は殺されてしまったのです。

ダニエル書 5 章を読むと分かります。

ダニエル書 5 章 29 節、30 節

**そこでベルシャツアルは命じて、ダニエルに紫の衣を着せ、金の鎖を彼の首にかけさせ、彼はこの国の第三の権力者であると布告した。その夜、カルデヤ人の王ベルシャツアルは殺され、**

と書かれています。

これこそ主のご摂理<sup>摂理</sup>でした。彼が殺されたので、次にダリヨスという王が出てきました。ダリヨス王はダニエルを尊重しましたし、用いました。もしダニエルがベルシャツアルによって国の第三の司に任命されていなかったなら、単なるユダヤ人として気にも留められなかったことでしょう。ダリヨス王はダニエルを用い、国の最高の司に任命しました。

ダニエルがそのように用いられるのは、当然のこととして、多くの人に妬まれるようになりました。あいつを何とかして失脚させようとする人々が次々と出てきました。妬む人々は手段を選ばず、ダニエルを陥れようとしたが、彼には隙がなかったのです。彼らは困ったと思ったに違いありません。ダニエルは熱心に、まじめに、怠ることなく、勤めを全うしたのです。もちろん人間を喜ばせるためではありません。主に仕えるためです。主をお喜ばせるためです。悪魔は、ダニエルに敵対する人々を用いて計略をめぐらしました。あのダニエルはユダヤ人だろう。彼は唯一の神を拝し、我々の神々を拝まない。彼は宮や寺を訪ねない。偶像には見向きもしない。彼は毎日、生ける神と言われる唯一の神を拝んでいる、と。このダニエルを失脚させるために他に道がないのです。そして、彼らは一つの新しい法律を設けようと計画を立てました。次の章を読むと分かります。

ダニエル書 6章6節から9節

それで、この大臣と太守たちは申し合わせて王のもとに来てこう言った。「ダリヨス王。永遠に生きられますように。国中の大臣、長官、太守、顧問、総督はみな、王が一つの法令を制定し、禁令として実施してくださることに同意しました。すなわち今から三十日間、王よ、あなた以外に、いかなる神にも人にも、祈願をする者はだれでも、獅子の穴に投げ込まれると。王よ。今、その禁令を制定し、変更されることのないようにその文書に署名し、取り消しのできないメディアとペルシャの法律のようになしてください。」そこで、ダリヨス王はその禁令の文書に署名した。

これに対してダニエルはどのような態度をとったのでしょうか。「さあ大変だ！」と心配するようになったのでしょうか。絶望したのでしょうか。いいえ、全く違います。

ダニエル書 6章10節

ダニエルは、その文書の署名がされたことを知って自分の家に帰った。彼の屋上の部屋の窓はエルサレムに向かってあいていた。彼は、いつものように、日に三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた。

この文章だけを見ると分かります。彼はいつものように祈り、感謝しました。即ち彼は久しい間、祈りの人でした。すべてを御手から受け取る人でしたから、祈りながら感謝することができたのです。生ける神は自分の祈りに答えてくださるということを、彼は何度も何度も体験してきました。ですから、自分の身に危険を及ぼす計画を知ったとき、主にすべてをお委ねしました。

ペテロは、当時の兄弟姉妹を励ますために書きました。

ペテロの手紙・第一 5章7節

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

これこそがペテロの経験でもありましたから、いろいろなことで悩んでいる周りの人々を励ますことができました。

ダニエルは思い煩いをすべて主に委ねました。ダニエルを妬む人々は、ダニエルが主に祈ることを知っていたので、王以外のものを拜んではならないという定めを作ったわけです。ダニエルが主の御前に祈っているときを、当時の法律を破っているところを、彼らは見つけました。

ダニエルについて私たちがはっきり言えることは、彼は「隠れた信者でいるよりは死んだほうがましだ」と、思っていたことです。彼は全く恐れを持っていませんでした。身の危険を覚悟して自分の高い地位を捨てて逃げることもできたはずですが、窓を全部閉め、押入れの中や、誰も見ていないところで、小さな声でこっそりと祈ることもできたはずですが、けれども彼はそのようにしませんでした。彼は自分の命はどうしても良いと、自分の命を軽くみていたのでしょうか。決してそうではありません。彼は、自分の命を軽く見ていたのではなく、彼は「自分は決して隠れた信者にはならない」と固く心を決めていました。彼は獅子のような性格の持ち主だったのではないのでしょうか。獅子よりも勇気を持っていたでしょう。窓を開け放し、両手を挙げ、エルサレムを見つめて祈るのは彼の習慣でした。どんなに敵が見ていてもそれには目もくれず、主に心に向けて祈るのは彼の習慣でした。大胆にも窓を開け放して祈るということは、ダニエルが一時的な衝動に駆られて空元気<sup>からげんき</sup>からしたことはなかったのです。成熟した男が、静かに考え、祈りながら決めたことなのです。

ダニエルは、おそらく八十歳くらいだったのではないのでしょうか。ともにバビロンに捕らわれてきた同胞にとって、彼はなんと素晴らしい証しだったことでしょう。ダニエルは公に祈り、公に証しし、人の誉れを少しも望まなかったのです。したがって、全く恐れをもっていなかったのです。妬む人々は祈るダニエルを見つけ、自分たちの定めたおきてを破ると言って、ダニエルを訴え出しました。彼らの思いは唯一つ、あのユダヤ人を引き降ろしてしまおう、ということでした。他の人につき従い、多くの人に混じって付いていくなら、当たり障りないでしょう。しかし天の神のご支配を日々の生活に受け入れ、それに心から従おうとする者には、誤解や迫害が伴います。

ダリヨス王は、何とかダニエルを救いたいと思ったのです。一番ショックを受けたのは彼に違いありません。けれど彼はまことの神を知らなかったし、まことの神を怖れなかったため、人間を喜ばせようと思ったのです。彼の前には二つの道があったことでしょう。一つは、ダニエルを獅子の穴に投げ込んで殺してしまうことであり、もう一つは、自分が定めたおきてを破り、自分の名誉を捨ててダニエルを救う道でした。まことの神を知らない王であるダリヨスは、自分のことを考え、ダニエルを獅子の穴の中に投げ入れることに

決めたのです。

しかし、この6章を読むと分かります。ダニエルは獅子に引き裂かれませんでした。考えられないことです。どのようなことが分かりませんが、間違いなく天使がダニエルを守りました。どのようにして守ったのか分かりませんが、ダニエルの体を豊かに包んで守っていたのか、天使が獅子の口を開かないようにしたのか、獅子の目の前に火を置いて獅子を恐れさせたのか、もちろん分かりません。ただ一つ分かることとは、その夜ダニエルは獅子の穴の中でぐっすり眠ったということ、これは考えられない奇跡です。もしかすると、彼は獅子のたてがみを枕にして眠ったかもしれません。この夜、「主の臨在」がダニエルを荒れ狂う野獣から守りました。これに引き換え、ダリヨス王は気の毒でした。まどろむこともできなかった、と書かれています。6章18節を読むと分かります。

ダニエル書 6章18節

**こうして王は宮殿に帰り、一晩中断食をして、食事を持ってこさせなかった。また、眠けも催さなかった。**

とあります。

私たちがダニエルのように、真っ暗な闇に陥り、危機にさらされ、試みられ、戦い、苦しみもがき、真っ暗な夜のようなときを過ごしたことがあるかもしれません。また、今そのところに陥っているかもしれません。しかしダニエルだけではなく、多くの人々は同じ辛いことを経験しました。

たとえば、パウロとシラス。二人は牢屋に投げ込まれました。そのとき彼らは主を賛美した、と書いてあります。そのときの二人は、主のために証しし主に仕えましたが、主に対する信仰のゆえに捕らえられ、牢獄につながれ、体は血まみれになったことでしょう。そして時は夜でした。真夜中ごろでした。光は見えません。しかし二人は祈っただけではなく、感謝したのです。ダニエルのように。

ダニエルに話しを戻しますと、ダリヨス王は翌日の朝まだ早いうちに大急ぎで獅子の穴に行き、生きているダニエルを引き出させました。この出来事から私たちは何を読み取ることができるのでしょうか。はっきり言えることは、幼いときからダニエルは自分を主に委ねた、ということです。

ダニエル書 6章16節

**そこで、王が命令を出すと、ダニエルは連れ出され、獅子の穴に投げ込まれた。王はダニエルに話しかけて言った。「あなたがいつも仕えている神が、あなたをお救いになるように。」**

これは王の心からの願いでした。「あなたがいつも仕えている神」、たまに、ではありません。

## ダニエル書 6章20節

その穴に近づくと、王は悲痛な声でダニエルに呼びかけ、ダニエルに言った。「生ける神のしもべダニエル。あなたがいつも仕えている神は、あなたを獅子から救うことができたか。」

王ダリヨスは今までのダニエルを良く知っていましたから、ダニエルの神は常に生きてダニエルを守っておられることを認めざるを得なかったのです。また王はダニエルが常に「生ける神」を信じただけでなく、「神に仕えていた」ことも認めたのです。

ダニエルは幼いときから、「主に心から仕えたい、主のために生きたい」と望んだのです。ですから、いつも主のみこころをたずねました。「主よ。どうしたら良いのですか。教えてください」と。これこそ、ダニエルの変わる事のない祈りでした。ダニエルの心は、幼いときから「主を怖れる恐れ」に満ちていました。「主を怖れる恐れ」を持つことが、最も大切なのではないのでしょうか。ダニエルにとり、それは言うまでもなく決して簡単なことではありませんでした。ダニエルの環境は異邦の国の中でした。イスラエルから連れてこられ、異邦の教育を受け、文学も異邦のものを学びました。しかし「まことの神を怖れる恐れ」は、ダニエルが異邦のものとの妥協することを避ける勇気と力を与えました。王と同じ食べ物を食べなさい、と。(王の食べ物はおいしいです。最高のものです。)しかし、この権威ある王の食べ物を食べなさいと言われたとき、ダニエルは「いやです」という態度をとったのです。なぜこの態度をとったかと言いますと、「偶像に捧げてから食べる、王の食べ物は絶対に食べない」と決めたからです。

ダニエルは、王に喜ばれようとはひと時も思ったことはありません。ただ主だけをお喜ばせしようと主に仕えたのです。私たちは、ダニエルが食べたり飲んだりすることはそれほど大切なことではないと考えるかもしれませんが、ダニエルにとって、主のみことばを一つ残らず守るということはかけがえのない大切なことでした。「主を怖れる恐れ」から、彼は主のみことばを破ることを恐れしました。

主のみことばの中には、いわゆる外面的なことがたくさん書かれています。ですから、パウロの時代はそうであっただろうが、今は時代が違うからこれは当てはまらない、などとみことばを曲げてとるなら、本当に大変なことになります。

「聖書は神のことば」です。一つ一つのことばは、「主の靈感」によって書かれています。それを認め、また忠実に従うなら、大いなる祝福があるに違いありません。主に対する全き服従には、素晴らしい豊かな恵みが伴います。

ダニエル書の1章から分かりますが、彼は若いとき(十五、六才だったかもしれませんが。)どのような態度をとったか書かれています。

## ダニエル書 1章15節

十日の終わりになると、彼らの顔色は、王の食べるごちそうを食べているどの少年よりも良く、からだも肥えていた。

ダニエル書 1章20節

王が彼らに尋ねてみると、知恵と悟りのあらゆる面で、彼らは国中のどんな呪法師、呪文師よりも十倍もまさっているということがわかった。

ダニエルは、すべての若者よりも健康にまさり、他の博士より知恵と理解において十倍もまさっていた、と書かれています。これは主なる神のみわざであり、説明できないことですが、主の祝福の現われであったに違いありません。

ダニエルの出来事を見ていきますと、

・主に常に仕えるには勇気が必要だと分かります。

この勇気は祈りによってのみ生まれます。主と一つになることによるのみ、このような勇気が与えられます。知恵と理解力、主なる神の奥義を知る力も、祈りによってのみ与えられる、とダニエルは確信しました。ですから彼は絶えず主を呼び求めたのです。降神術師や魔術師たちは、夢の解き明かしができなかったのです。しかしダニエルはできたのです。なぜなのでしょう。自分で考えて何とかしようと思ったからではないのです。祈ったのです。「私は分かりません。無力です。あなたが哀れんでくださらなければ絶望的です」と彼は祈ったのです。祈りのうちに夢の解き明かしを教えられたのです。

常に、絶え間なく主に仕える者には、主の奥義が現わされてきます。ダニエルは主を知らない王の権威の前に小さくなっていませんでした。平気で自分の仕える主の御名を口にしていました。後に国の司にまで引き上げられてもなお主に仕え続けました。彼はどんなに暗闇に陥ったときにも、また高く榮譽ある立場に立たされたときにも変わらず、「まことの神」に仕え続けました。彼はまたあるとき、ネブカデネザルが見た二つの夢を解き明かしたことがありました。最初の夢は恐ろしいものでした。即ち、王が動物のようになる。知識がなくなる。普通の人間のように食べるのではなく動物のように食べる、...と。ダニエルはそのときも王を恐れず、恐ろしい夢の解き明かしをしました。彼は常に変わらず、王の恐ろしい夢の解き明かしをしたのです。人間を喜ばせようとはしなかったのです。彼は常に変わらず、主にだけ従おうと心から願いました。

この出来事後、聖書にはしばらくの間ダニエルについて書いてありません。しかし、この間にもダニエルは共に捕らわれていた同胞の間で、間違いなく良き証しをしたに違いありません。ある日突然、壁の奇妙な文字を解き明かすため、ベルシャツアル王に呼び出されました。恐ろしい支配者の前に、ダニエルは勇気をもって出て行きました。ベルシャツアルはダニエルを殺そうと思えばすぐにでもそうすることができたのです。この暴君の

前でも、ダニエルは少しの恐れをもたず、真理を包み隠さず伝えました。

ダニエル書 5章25節から28節

「その書かれた文字はこうです。『メネ、メネ、テケル、ウ・パルシン。』そのことばの解き明かしはこうです。『メネ』とは、神があなたの治世を数えて終わらせられたということです。『テケル』とは、あなたがはかりで量られて、目方の足りないことがわかったということです。『パルシン』とは、あなたの国が分割され、メディアとペルシヤとに与えられるということです。」

ダニエルはどうしてそのようなことが言えたのでしょうか。また確信できたのでしょうか。祈った結果です。

今話しましたように、ダニエルは幼いときから自分は生ける神にのみ仕えていこうと決めたのです。ベルシャツアル王の前にもその通りでした。世界の支配者は次々に変わったのですが、ダニエルだけは変わらなかったのです。「今日はこう」、「明日はそのように」と、環境によって行き先を変えるようなことは、ダニエルにはできなかつたのです。彼は常に主に仕えていました。主のご栄光を現わしていくことだけが、ダニエルの持っていたただ一つの目的でした。ダニエルはダリヨス王のもとで総理大臣を務めていました。しかし、彼は異邦の偶像礼拝を全くしませんでした。妥協は「霊的な死」を意味する、と彼は確信しました。高い地位についていながら、常に主に仕えるということは大変です。決して簡単ではありません。なんと多くの人々が高い地位を求め、また名誉を求め、主に捨てられていったことでしょうか。人気、榮譽、地位、富、これらは悪魔が用いる最も鋭い試みの武器ではないでしょうか。ダニエルは、これらには目もくれず、ただ「まことの神」にのみ仕えてきました。

・ダニエルからもう一つ教えられることは、主に支配されている者は友を自分のものとし、自分の環境を変えるために妥協するようなことは決してしない、ということです。

何も無いときに主に従うことは、それほど難しくないでしょう。しかし、戦いが起り、暗闇の中に入ったとき、本当に自分は主に根ざして歩んでいるかどうかが明らかになります。もしダニエルがこのまま続いて、どこまでも主に従っていくなら、彼は王の寵愛を失うばかりでなく、一番哀れな死に方をしなければならぬ羽目に立ち至ったことでしょうか。主だけを礼拝するか、獅子の穴に投げ込まれるかというところに立たされました。しかし、ダニエルは少しの妥協も見せませんでした。多くの迫害者に取り巻かれ、危機の真ん中にありながら、彼は祈りました。すべて主に委ねたのです。「わたしを呼べ。わたしはあなたに答える」とダニエルは確信し、経験しました。

私たちもこのような危機に出会ったことがあるでしょうか。あなたは主のみこころを知っていました。ですから主に従いました。もし妥協したなら、そのときあなたは居心地よい環境に入ることができたでしょう。しかしあなたは妥協せず、主にだけに従ったので、

悩むようになりました。行く末が全く分からなくても、いつも主につき従っていく勇気を持っているでしょうか。不安な良心を持っているよりは、ダニエルのようにむしろ貧しく、また誤解されていたほうが良い、と思っているのでしょうか。

もちろんダニエルも誘惑されたに違いありません。悪魔は言ったのではないのでしょうか。「ダニエル。お前は国の長官であり、しかもまことの神を礼拝している。だから今おまえが立場を失わないように、また、まことの神を礼拝することを続けたいなら、<sup>もぎて</sup>定められた三十日間だけ、戸を閉めてそこで祈っていたらどうか。お前は異邦の国では尊い神の証し人だ。少し妥協し、戸を閉めて祈り、神に礼拝し続けたほうが良いのではないかと、悪魔はささやいたに違いありません。

多くの人は目的のためには手段を選ばずで、目的に到達できさえすれば少しくらい妥協しても良い、方法はどうでも良いと考えます。ダニエルは、そのようなことをしませんでした。その結果はどうあろうと、主を怖れる恐れを持ち続けることが大切です。私たちは、結果を見る必要はありません。日々主の御声を聞きそれに従っていくことだけが大切です。

ダニエルは絶えず主にだけ従っていました。ですから結果を少しも恐れなかったのです。お腹のすいている犬は肉を見せると跳んで来ます。そしてその人に従っていくでしょう。しかし満腹した犬は見向きもしません。多くの人は目に見えるところに従っていきます。少し何かが起こると自分の立場を良くし、楽にしようと妥協して、自分の考えで行動してしまいます。しかし犬によっては、道が良くても悪くても、雨が降っても槍が降っても、主人に従う犬もいます。

イエス様は、どんなことがあっても「主に従い、仕える者たちだけ」を、父なる神に言い表わしておられるでしょう。

私たちはボートを漕いでいる人のように、顔だけは主に向け、実際には主に背を向け反対のほうに走っているような状態にないでしょうか。この世界に一つのクラブがあります。このクラブは、末の世になればなるほど、会員が増えてくるのではないのでしょうか。このクラブに属する者の名はいろいろあります。ある人の名は「二面相さん」、<sup>二</sup>「股五役君」、<sup>二</sup>平安、平安と言っているが実は平安のない「不安さん」、<sup>二</sup>愛、愛と言って妥協してもまことの愛だと言っている「偽善君」、<sup>二</sup>二つの舌を持っている「二枚舌さん」、それから時々だけしか主に仕えない怠け者の「不忠実君」。このようないろいろな名前の人々が、このクラブに属しているのです。もしあなたに親しい友がいて、その人を愛し尊敬していたとします。しかし、自分が苦しみに遭い、逆境におかれ、破産したとき、その友があなたを見捨てたとします。そのようなとき、あなたはその友を許すことができるかもしれません、会いたくない、交わりを欲しくないと思うのではないのでしょうか。私たちも、その友のように、順境のときは喜んで主に仕えるが、逆境になると時々だけしか主に仕えない者ではないで

しょうか。

主に仕え続ける主の仕え人こそ、要求されています。ダニエルはそうでした。彼は常に主に仕え続けたのです。どんな試みがきても少しも動揺せず、しっかりと立っているためには、何としてもダニエルのような「祈り人」とならなければいけないのでないでしょうか。「祈り」は、強い性質を与えてくれます。

祈りの輪に入っている兄弟姉妹は今690人になりましたから、本当に希望あるのみです。どのようなことがあっても主は聞いてくださるのです。

了